

高校生を対象とした School Refusal Assessment Scale-Revised

(SRAS-R) 日本語版の作成と信頼性, 妥当性の検討

○中山義朗¹・井永浦拓²・安藤孟梓¹

(¹ 福山大学 人間文化学部心理学科, ² 北海道教育大学 大学院教育学研究科 高度教職実践専攻)

問題・目的

不登校は機能分析的モデルに基づく不登校行動として理解される。不登校行動とは、子ども本人が学校に出席することを拒むこと、または1日を通して授業に出続けることができないことである (Kearney & Silverman, 1996)。文部科学省 (2016) は、不登校を分類しているが、アセスメントおよび介入場面においては有効ではない (土屋, 2010)。そこで本研究では、機能分析に基づいて分類される不登校行動に焦点を当てる。不登校行動を維持している要因すなわち不登校機能を特定するための尺度はあるものの国内において高校生を対象とした SRAS-R は開発されていない。

そこで高校生を対象とした SRAS-R 日本語版を作成し、因子構造および信頼性, 妥当性の検討を行う。

方法

研究協力者: クラウドソーシングサービスに登録している高校生 242 人 (平均年齢 16.61 歳, SD = .92) を対象とした。

調査材料:

①デモグラフィック項目 (年齢・性別・学校の形態), ②SRAS-R 日本語版, ③CES-D 日本語版

調査手続き: 翻訳は、稲田 (2010) のガイドラインに沿って行った (Table 1)。その後、2024 年 11 月にクラウドソーシングを用いたオンライン調査を行った。

統計解析: 原版では複数の因子構造が指摘されているため、SRAS-R 日本語版の因子構造の確認を行うために確認的因子分析を行った。モデルの適合度の基準値は Schermelleh-Engel & Moosbrugger (2003) に基づき、CFI は .95 以上、RMSEA は .08 以下、SRMR は .10 以下とした。信頼性は α 係数および ω 係数を算出し、妥当性の確認には CES-D との Pearson の積率相関係数を算出した。統計解析には JASP0.19.1 を用いた。

倫理的配慮: 本研究は福山大学人間文化学部心理学科における既定の倫理指針に基づき実施した。

結果

研究協力者は男性 36 人 (14.88%), 女性 206 人

(85.12%) であり、所属する学校の割合は、全日制 214 人 (88.43%), 通信制 25 人 (10.33%), 定時制 3 人 (1.24%) であった。SRAS-R 日本語版について原版 (Kearney, 2002, 2006) と同様の 3 因子構造または 4 因子構造が当てはまるか確認するために、確認的因子分析を行った。解析の結果、3 因子構造の適合度は、CFI = .82, RMSEA = .11, SRMR = .10 であった。4 因子構造の適合度は、CFI = .82, RMSEA = .11, SRMR = .01 であり、どちらも十分な値を示さなかった。次に、信頼性を確認するためにクロンバックの α 係数、 ω 係数を算出したところ、3 因子構造全体では $\alpha = .92$, $\omega = .87$, 4 因子構造全体では $\alpha = .93$, $\omega = .88$ であった。CES-D との相関係数は 3 因子構造では $r = .64$, 4 因子構造では $r = .65$ であった。

Table 1

School Refusal Assessment Scale-Revised (SRAS-R) 日本語版

項目	項目内容
1	学校に関係すること (例: テスト, 通学のバスや電車先生, 警報の音など) が怖くて、学校に行きたくないと思うことがどのくらいありますか?
2	学校で他の生徒と話すのがつらいので、学校に行きたくないと感じることがどのくらいありますか?
3	学校に行くより、親と一緒にいたいと感じることが、どのくらいありますか?
4	平日 (学校がある日) に学校に行かずに、外出して何か楽しいことをすることが、どのくらいありますか?
5	学校に行くにつらくなったり、落ち込んだりするので、学校に行きたくないと感じることがどのくらいありますか?
6	学校で人前が出るのが恥ずかしいので、学校に行きたくないと感じることがどのくらいありますか?
7	学校にいるときに親や家族について考えることがどのくらいありますか?
8	平日 (学校がある日) に学校に行かずに、家族以外の人と話したり、会ったりすることがどのくらいありますか?
9	家にいるときや友だちと一緒にいるときと比べて、学校で嫌な気持ち (例: 怖い, 緊張する, 悲しい) になることがどのくらいありますか?
10	学校に友だちが少ないので、学校に行きたくないと感じることがどのくらいありますか?
11	学校に行くより、家族と一緒にいたいと感じることが、どのくらいありますか?
12	平日 (学校がある日) に学校に行かずに、他の楽しいこと (例: 友達と遊んだり、外に遊びに行くなど) をすることは、どのくらいありますか?
13	土日 (学校が休みの日) に学校のことを考えると、嫌な気持ち (例: 怖い, 緊張する, 悲しいなど) になることがどのくらいありますか?
14	学校の中で誰かと話さなければならぬような場所 (例: 廊下、人が多くいる場所など) を避けることがどのくらいありますか?
15	学校の先生に勉強を覚えてもらうより、家で親に教えてもらいたいと思うことがどのくらいありますか?
16	学校以外で楽しいことをしたいので、学校に行きたくないと思うことがどのくらいありますか?
17	学校について嫌な気持ち (例: 怖い, 緊張する, 悲しいなど) を感じるものが少なくなれば、学校に行きやすくなると思いますか?
18	新しい友だちが作りやすければ、学校に行きやすくなると思いますか?
19	親と一緒に登校してくれれば、学校に行きやすくなると思いますか?
20	学校が終わってから、好きなこと (例: 友達と遊ぶなど) がもつてきたら、学校に行きやすくなると思いますか?
21	同年代の他の人と比べて、学校について嫌な気持ち (例: 怖い, 緊張する, 悲しいなど) になることがどのくらいありますか?
22	同年代の他の人と比べて、学校で人と距離をとることがどのくらいありますか?
23	同年代の他の人と比べて、家で親と一緒にいたいと思いますか?
24	同年代の他の人と比べて、学校以外で楽しいことをしたいと思いますか?

考察

本研究において先行研究と同様の因子構造が再現されなかった理由として文化の違いが考えられる。今後は、わが国の高校生における因子構造を検討し信頼性, 妥当性の確認を行う必要がある。